

私たちの町の文化財

■第8話 西福寺庚申塔三尊板碑

西福寺の一角に佇むこの板碑は、自然石を利用して造られていて、一見すると市内でも見かける室町～戦国期の板碑と変わりないように見えます。しかし板碑に刻まれた内容を見ると、熊本屈指の板碑であることがわかります。正面中央には阿弥陀如来を中心に、観音菩薩・勢至菩薩が脇を固めています。ここまでは他の板碑でも見かけるのですが、碑面左端に「于時明應八丁未天八月日庚申溝一結衆敬白」とあります。明應8年（1499）という年代は、熊本県内の板碑でも屈指の古さで、さらにこれが庚申講（溝は誤り）の結衆を示す板碑であることが、より資料的価値を高めています。結衆は21人で構成されていて、碑面の下方に刻まれています。熊本における庚申信仰が約500年以上前にさかのぼることを証明する物証であるといえます。板碑の建てられた当時、この周辺は鹿子木氏が治める地域であることから、もしかしたら庚申信仰が鹿子木氏の領地内で行われていたのかもしれませんが。この板碑を前にすると、その当時の情景だけでなく、庚申信仰が熊本にどれほど浸透していたのか、ロマンが広がります。

熊本市文化振興課 藤島 志考氏

板碑に刻まれた内容で板碑の歴史的価値を読み取る文化振興課の職員さんの知識がすごいな

